

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 葛西康德

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



『オデュッセイア』を読む ヒュブリス！ どっちが？

葛西康德

(文学部西洋古典学)

2016年度学術俯瞰講義 第二回

2016年4月13日



Courtesy of Professor François Lissarrague

ヒュブリス (*hybris*)

アリストテレス『弁論術』第二巻第2章「怒り(*orge*)」

「怒り」は「過小評価slighting(Fisher, *oligoria*)」から生じるものとした上で、これを三分する。

「侮辱(*contempt* (Fisher), *kataphronesis*)」

「いじめ(*spite* (Fisher), *epereasmos*)」

「ヒュブリス(*hybris*)」

ヒュブリス・アリストテレス『弁論術』

第二巻第2章 「怒り(*orge*)」

- 「怒り」は「過小評価slighting(Fisher, *oligoria*)」から生じるとした上で、これを三分する。
- 「侮辱(contempt (Fisher), *kataphronesis*)」
- 「いじめ(spite (Fisher), *epereasmos*)」
- 「ヒュブリス(*hybris*)」

Arist.Rh. 1378b22-34

- 「ヒュブリスを行っている者もまた、軽蔑している者に含まれる。何故なら、ヒュブリスとは、その行為の結果自体をその行為者が求めるのではなく、何とかして行為者が心地良くなることを目的として、それを受け取る側(被害者)が「恥(*aischyne*)」を感じるような事柄を為したり、言ったりすることだからである。それ故、何らかの対応行為(*antipoiontai*)をしている者は、ヒュブリスをしているのではなく、報復行為(*timorountai*)をしているだけなのである。つまり、ヒュブリスをしている者というのは、他人に対して優越したいと思って、決してほめられたことではないことを為すことによって心地良さを求めている人のことを言うのである。だから、若者や裕福なものは、えてしてヒュブリスを行うものなのである。というのは、彼らは他人に優越しようと思ってやっている点で、ヒュブリスを行っているのである。恥をかかせること(*atimia*)はヒュブリスの属性であり、恥をかかせている者は相手を軽蔑しているのである。というのも、何の価値も認めないということは、プラスの評価であれ、マイナスの評価であれ、価値を全く認めないことだからである。それ故、アキレウスは軽蔑されたと感じて次のように言った。『彼(アガメムノン)は私の価値を否定した。分配された褒美を私から奪って自分の手許にしているゆえ。』あるいはまた、『私をまるで浮浪人か何かのように扱ったのである。』つまり、これらのことを理由に、彼(アキレウス)は怒っているのである。」

(葛西訳)

Arist.Rh. 1378b22-34

- 「ヒュブリスを行っている者もまた、軽蔑している者に含まれる。何故なら、ヒュブリスとは、その行為の結果自体をその行為者が求めるのではなく、何とかして行為者が心地良くなることを目的として、それを受け取る側（被害者）が「恥(*aischyne*)」を感じるような事柄を為したり、言ったりすることだからである。それ故、何らかの対応行為(*antipoiontai*)をしている者は、ヒュブリスをしているのではなく、報復行為(*timorountai*)をしているだけなのである。つまり、ヒュブリスをしている者というのは、他人に対して優越したいと思って、決してほめられたことではないことを為すことによって心地良さを求めている人のことを言うのである。」

(葛西訳)

Arist.Rh. 1378b22-34

- だから、若者や裕福なものは、えてしてヒュブリスを行うものなのである。というのは、彼らは他人に優越しようと思っやっている点で、ヒュブリスを行っているのである。恥をかかせること(*atimia*)はヒュブリスの属性であり、恥をかかせている者は相手を軽蔑しているのである。というのも、何の価値も認めないということは、プラスの評価であれ、マイナスの評価であれ、価値を全く認めないことだからである。それ故、アキレウスは軽蔑されたと感じて次のように言った。『彼(アガメムノン)は私の価値を否定した。分配された褒美を私から奪って自分の手許においているゆえ。』あるいはまた、『私をまるで浮浪人か何かのように扱ったのである。』つまり、これらのことを理由に、彼(アキレウス)は怒っているのである。」

(葛西訳)

Arist. Rh.1379b 24-29

「さらに、次の五種類の人々の前で(ないし、関係でpros)、じぶんを過少評価する者たちに怒りを覚える。すなわち、自分が張り合っている者たち、尊敬している者たち、その者たちに賞賛されたいと思っているそのような者たち、その者たちに対して恥ずかしいと感じるそのような者たち、あるいはまた、その人たちの前では彼らが(私に)恥ずかしいと感じるそのような者たち、以上五つのタイプの人々の前で。ある人がこれらの人々の前で過小評価の目で見ると、彼ら(過小評価された人々)は一層強くその者に対して怒りを覚えるのである。その者たちを護るために救いの手をさしのべないのは恥であるような人々、例えば、両親、子供、妻、支配下の者たちに対して過小評価したふるまいをする人々、そのような人々に対して人は怒るのである。」

(葛西訳)

アドルノ・ホルクハイマー 『啓蒙の弁証法』

- けれども、この無法者ポリュペーモスは、啓蒙された幼年時代のお伽噺の世界では、巨人のゴリアテになぞえられているように、文明のタブーがきめつけるような、たんなる無頼漢につきるものはない。彼が自己保存のために秩序と慣行とを取り入れた貧しい領域のうちでも、彼には和解をはかる者としての一面が欠けているわけではない。彼が自分の羊や山羊の仔たちに親の乳房をあてがってやる時、この実際的行為には生き物たち自体に対する思いやりが含まれているわけだし、また眼を抉られた彼が、先導の牡羊に対して、わが友と呼びかけ、なぜ今度に限ってお前は一番最後に洞穴を出るのか、お前は主人の災難を悲しんでいてくれるのか、と尋ねるあの有名な件は、終りのところではひどく粗暴なものとなっは来るが、感動的な力に溢れており、これに匹敵する場合と云っては、僅かに、あの『オデュッセイア』のクライマックス、帰宅するオデュッセウスを老犬アルゴスがそれと認める場面があるだけである。この巨人の挙動はまだ充分性格として客観化されてはいなかった。

アドルノ・ホルクハイマー著『啓蒙の弁証法：哲学的断想』徳永恂訳、岩波文庫、2007年、pp.137-138

『オデュッセイア』 第9巻446－460行

その羊をまさぐりながら、強力なポリュペーモスが言いますには、「おい牡羊よ、どうしてこんなに羊の群の、いちばん後から出ていくのか、けして前には他の羊にとり残されて、後からいきはしなかったになあ、それどころか、ずっと先に立ち、牧草の花の柔かなのを喰ったものだが。大股に歩いて、真先に河の流れに往き着いてな。また夕方、いちばん先に、羊の小屋へ帰りがっていたものなのを。それが今では逆さまに、いちばん後からついてくとは。いかさまお前は主人の眼球が失ったのを悼んでくれるか、悪い男が来て潰したのを。呪わしい仲間と力を合わせ、わしの心を酒ですっかり蕩かしてな、駄礼毛志内だ、あいつは決して破滅を免れ切ってはいぬに違いない。もしもほんとに、お前がわしと心を合わせ、物を言う力を持てたらなあ、それで彼奴が、いったい何処に私のひどい気負いを避けて逃げ込んでるか言ってくれたら。そうしたらば、殺してやって、脳味噌を洞穴じゅうあっちこっちと、地面いちめん撒いてやろうに、そしたら私の胸も傷の痛みを忘れようが、あの碌でなしの駄礼毛志内が私に負わせた。」

ホメーロス『オデュッセイア（上）』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、pp.281-282

資料1

呉茂一(1897-1977) 呉秀三(医学)の子。 箕作家(東京大学の学問的かつ生物的創始母体)の子孫。「津山洋学資料館」www.tsuyama-yougaku.jp

1953年東京大学大学院「西洋古典学」初代教授(駒場キャンパス)。日本西洋古典学会初代委員長。『イーリアス』『オデュッセイア』の翻訳。その他『花冠』など。

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

津山洋学資料館ウェブサイト
<http://www.tsuyama-yougaku.jp/>

資料2

Richmond Lattimore (1906-1984),

Classicist and Translator of the Iliad and the Odyssey

Owen Lattimore (1900-1989), Sinologist, McCarthyism,

長尾龍一『オーウェン・ラティモア伝』(信山社2000、『アメリカ知識人と極東』東京大学出版会)1985)

‘Trumbo(2015)’

デモステネス第21番弁論 『メイディアス論駁—パンチについて』47節

「もし、誰かが、誰かにならして、例えば、子供、女性、男性、そして彼らが自由人であれ奴隷であれ、ヒュブリスを行った場合は、あるいは、これらの人のうちだれかに対して、ノモスに反すること(*paranomōn*)を行った場合は、アテーナイ人の誰であれ、障害事由無き限り誰でも(そうするのが妥当と)判断すれば、テスモテタイ(*thesmothetai*)に対して、グラフィエ(*graphe*)を提起できる。当該テスモテタイは、公的障害事由無い場合は、グラフィエ提起後30日以内に、もし障害事由あればできるだけ早く、エーリアイアにその事件を移送すべきである。エーリアイアが有責と判断した場合は、直ちに、いかなる罰ないし賠償が適当かを算定せよ。ノモスに従い、グラフィエを提起した者で、それ以上訴訟が進まない、または五分の一の評決が得られない場合、公的機関に1000ドラクマを支払え。一方、ヒュブリスに対して金銭での責任ありと評決された者は、自由人に対するヒュブリスの場合、支払いが履行されるまで監獄に入れられるべきである。」

(葛西訳)

デモステネス43番 弁論75章

「アルコーン(担当公職者)が、孤児(*orphan*)、家付き娘(エピクレーロス、*epikleros*)、誰も世話する者がいなくなったオイコス(イエ)、夫に先立たれてオイコスに残った、しかも妊娠している女性の面倒がきちんとみられているかどうかをチェックすることを職務とする。アルコーンは、これらの人々のことを気につけ、もし誰かが彼らにヒュブリスを働くことのないようにしなければならぬ。もし誰かがヒュブリスを働か、あるいはノモスに反する行為(*paranomion*)をした場合は、行為の程度に従って罰を課する権限がアルコーンにはある。もし、アルコーンが権限で認められているよりも重い罰を加害者に与えたいと思うならば、五日以内に加害者を招集し、彼が適当と判断する罰を訴状に記載して、ヘーリアイアに提訴しなければならない。もし、有責と評決された場合は、ヘーリアイアがいかなる罰を加害者が被るべきか、あるいは罰金をいくら支払うべきかを判断すべきである。」

(葛西訳)

『イーリアス』におけるヒュブリスの例

第1巻 202－214行

「何故また今更、雲楯をたもつゼウスの御子が、おいでられたのです、いかさまアトレウスの子アガムノーンの、暴戾のさまを見られようとか。だがはっきりと言っておきます、これは必ず果されようと思うことながら、度を過ぎた身の驕慢ゆえ彼の男は近々命を殞すことでしょう。」それに答えて、燦めく眼の女神アテーナーがいい返すよう、「私が天から降りて来たのは御身の憤りを宥めようとか、もしや御身が肯いてくれようかと。また私を遣わされたのは腕の白い女神ヘーレーで、(御身ら)双方ともを同様に心にいとしみ気づこうてのこと。だからさあ、諍いは止めにしなさい、また剣を手に引き抜かないで、それより全く言葉だけで咎めておやり、きっと将来どうなるかを。何故ならはっきり言うとおこうし、必ずそれは果されようが、まさしくいつかは御身へと三倍ほどもの立派な品が、この非道さゆえ寄越されようから、今は忍んで、私らの言うとおりにしなさい。」

「暴戾」(乱暴で人道にはずれていること)

『オデュッセイア』におけるヒュブリス

第1巻 365－380行

一方、求婚者どもは、昏い影をさす大広間一杯に、騒ぎ立てていた、誰も彼もみな、奥方の臥床の傍に臥たいとばかり胸に願って。その者どもに向かつて、利発なテーレマコスが、こう話をはじめた。「私の母の求婚者たちよ、心驕って、さんざ非道をおはかりだが、現在はまあ食事なりしてたがいに楽しむことにしましよつ、だが叫び立てるのは止めて貰いたい、今この謡いを傾聴するのは、いかほどにかありがたいこと、ここにおいでの伶人は、いかにも立派な、神々ともならぶ方ゆえ。それで明日は朝早くから、集会場へ出かけ、坐るとしましよつ、ひとり残らず。そこで私は皆さん方に遠慮せず、きっぱりここから立ち去るように宣言しようと思ってるのです、よそで宴も、心配したが宜しいでしょう、家から家へ移動して、自分の身上をへつつっていくよつ。だが万一にも、皆さんとも、こうしてゆくのが気楽でまた結構なことと考えるなら、――つまり一人の男の身代を、償いもせず、なくしていくのを、――それならへつつていった方がいい。私も永遠においでに神々を呼び訴えまじよつよ、いつかはゼウスが報復の業を成就させて下さるようにと。その時にはこの屋敷内で、償いなしに、身を果されることではよつから。」

『オデュッセイア』におけるヒュブリス 第14巻 259－265行

このおり、いかさま私は、腕利きの水夫仲間たちに命令して、そのまま船の傍にとどまり、船を守っていさせておき、斥候を出して、ほうぼうを偵察するよう指図したのです。ところが彼らは、傲りの心に打ち負けて、おのれが血気の逸るに任せ、いきなりとエジプト人らの立派に仕上げた田畑をさんざん荒らしたうえにも、女たちや頑是ない幼児までを攫って来、男たち自身は殺していったもので、騒ぎはすぐと都へ伝わり、

ホメーロス『オデュッセイア（下）』呉茂一訳、岩波文庫、1972年、p.50

『風の谷のナウシカ』

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました。

映画『風の谷のナウシカ』一場面
監督:宮崎駿
公開:1984年

『オデュッセイア』 第6巻119－152行

「やれやれ、何ということ。今度はまたどのような人間どもが住む土地へ辿りついたか、おおかたはまた乱暴非道な奴らのうえに野蛮で掟ても知らない者か、それとも客に親切で、神を恐れる心を持つ族であろうか。まるで少女らみたような、女性の声音が、あたりに響いて、聞こえてくるが、あれはニンフたちなのであるうかしれぬ、山々の峻しい峰や諸川のもとの泉流、あるいは牧草茂る沢の牧やに棲んでおいでの。それとももしや、言葉を話す人間どもの、住む間近くに来たのだろうか。ともかくも、さあ、私が自身で実際、探ってしらべることにしよう。」

『オデュッセイア』 第6巻119－152行

こう言って、とうといオデュッセウスは、木立の下を出かけていった、びっしり茂った森の中から、頑丈な手で、葉のいっぱいについた枝を折り取ってから、肌宛てがい、丈夫のかくし処を蔽うようにし、出かけていったその様子は、さながら山間に生い立った獅子が、勇武を恃んで、雨が降ろうと、風が吹こうと出かけてゆくのに、その両眼は火と燃えたつ、しかもなお牛の群れ、あるいは羊の群れ、また野に棲む鹿の群をめぐらして襲いかかり、または胃の腑の命ずるままに、家畜の群に手を出そうとて、(人間の)堅固な住居を侵そうとする。そのようにオデュッセウスは、まさしく裸身とはいいながら、結髪のよい乙女の群にまじろうとした、というのも、せっぱ詰まって仕方がないので。

ホメーロス『オデュッセイア(上)』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.184

『オデュッセイア』 第6巻119－152行

だが汐水のため、さんざ痛めつけられた姿は、乙女らの眼に途方もなく恐ろしげにも写ったので、みな怖がって浜辺の方へとてんでんばらばら逃げ散ったが、ただ独りアルキノオスの姫だけは残っていた、アテーナー女神がその胸に、大胆さを吹き込まれ、恐れ心をその手足から取り去られたので。そこでしっかり踏み止まって、面前に立ち向かうのに、オデュッセウスは、とやかくと思ひ惑った、あるいは眉目美しい乙女の膝に取りすがって、惘願したものが、それともこの儘離れて立って、優しい言葉で、都へと行く道を訊ねたうえ、着物もくれるように頼んだものかと。もとよりかように思案するうち、離れて立ったまま、優しい言葉で姫にむかって惘願するのが得策だろうと思ひなされた、万一膝になど取りすがって、そのため乙女を立腹させてはなるまいから。そこですなわち、もの柔かに、分別のある言葉でもって、話しかけるよう、「お膝にすがってお願いいたします、貴女はきっと女神でおいでか、それとも死ぬべき人間なのか、もし広大な天をお保ちの神々の、お一人ならば、ゼウス大神のおん娘という、アルテミスさまに、私としては、お姿といい、背丈といい、なり形といい、いちばん近いと存じあげます、

『オデュッセイア』 第6巻186-193行

それに向かつて、今度は白い腕のナウシカアーが、答えていうよう、「まだ存じあげぬ方ながら、悪人でも、うつけ者でもないとお見受けいたしますが、人間たちに幸福をお頒けなさるのは、オリュンポスにおいで、のゼウスさま、よい者へなり、悪人なりへ、それぞれ思いのままを分配なさいます、あなたがお受けの分け前も、多分はこうしたものゆえ、ともかくも、辛抱なさらねばなりませんまい。ところで今、私どもの国へ町へとお着きの上は、着る物はもとより、他のどんな物にも、不自由はおさせしませぬ、仕合わせ薄い乞丐人が、人に出会って、当然求めるほどのものなら。

ホメーロス『オデュッセイア（上）』呉茂一訳、岩波文庫、1971年、p.187

